

贈り物に見る言語文化的な日・韓比較研究

宋 庚俦

1. 研究目的

生活の中で行われている贈答行為、つまり、誕生日、結婚、葬式、クリスマス、父の日・母の日、お見舞い、中元・歳暮、お土産などに多く贈答行動が見られる。贈答行動はどの社会でも根強く存在しているが、あまり研究はなされていない。生活の中で、多かれ少なかれ贈り物をする習慣がよく見られる。しかし、国によって贈り物をする習慣、文化は大きく異なる。贈り物をする時期、物、贈る言葉、しきたり、機能などには差がある。例えば、日本は日本独特の贈り物文化である中元・歳暮がある。日本ではなぜ、中元・歳暮が多く見られるのであろうか。贈り物をするときよく耳にする「つまらないものですが」という言語行動や慶事と弔事でみられる機能(タブー)などを気にする文化的な面がよく見られる。このような表現には何があり、それをを用いる大きな理由は何かを研究し、どのような文化的背景が絡んでいるかについて研究を行った。また、韓国の贈り物における文化的・言語的な側面の比較を行い、両国の相違点が何かを研究した。そこで、①贈り物に関する文化的な背景、②贈り物をするとき用いる言語表現などについて考察し、日・韓における贈り物に関する意識がどうなっているかを研究した。

2. 先行研究

贈り物に関する研究は文化人類学、社会学でもっとも多く研究されている。贈与交換論の基礎をきづいた著作は B.マリノフスキ (B.Malinowski) の『西太平洋の遠洋航海者』(1922)と M.モース (M.Mauss) の「贈与論」(1925)が始まりであった。日本では柳田(1962)、折口らにより贈答の研究が基礎づけられた(成田 2003)。他には和歌森(1982)、室伏(1980)の『贈る論理・贈られる論理』、井下(1979)の「贈答行動にみる日本人の人間関係についての一考察—贈り物とお礼の第一次調査資料より—」などでは文化的な観点での研究が多くなされている。贈り物をする際の言語に関する研究は清(2003)の「「つまらないものですが」考—実態調査と日本語教科書との比較—」の研究がある。

3. 年中行事と通過儀礼に見る贈答行動と言語表現

3.1 年中行事から見る日本と韓国の比較

「表1」 一年の日・韓贈答行動の比較

	日本	韓国
1月	年賀	
2月	バレンタインデー	バレンタインデー・卒業・正月(年によって変化)
3月	ひな祭り・卒業・ホワイトデー	入学・ホワイトデー
4月	入学	
5月	子供の日・母の日	子供の日・父母の日・先生の日
6月	父の日	
7月	七夕・中元	
8月		盆(年によって変化)
9月		
10月		
11月	七五三	
12月	クリスマス・歳暮	クリスマス

日本のほうが韓国より贈り物をする機会が多少多い。韓国は正月と盆は旧暦で祝うので正月は普通2月が多いが1月か3月になることもある。盆も同じ旧暦であるため、8月か9月になることがある。日本と学校制度が違うため韓国は2月が卒業で3月が入学である。バレンタインデーとホワイトデーは日本と韓国は同じである。母の日・父の日は韓国では父母の日としてまとめられていることが日本と違う点である。また、韓国には先生の日が5月にある。七五三は韓国にはない行事である。

3.2 通過儀礼

通過儀礼では赤ちゃんの祝いと子供の祝い、大人の祝いにおいてそれぞれ贈り物が行われている行事を考察した。まず、赤ちゃんの祝いでは日本は七夜、命名、宮参り、食い初め、初節句、初誕生などがある。韓国では七日、百日、初誕生日などがある。日本と韓国では初誕生は同じく祝いをする。韓国では初誕生のときに「돌잡이」(トルチャッイ)というものがある。「돌잡이」というのは、お膳の上にいるいろいろなものを置いてその中から子供に何かを一つ選んでもらい、子供の未来を予測することである。日本にも地域によって違うが「돌잡이」に当たる「ハツトリ」¹という行事がある。置かれるものは米、お金、そうめん、なつめ、矢、本などである。置かれるもの一つ一つには込められている意味がある。「米」はお金持ちになることを願う意味、「お金」はお金持ちになってほしい意味、「そうめん」は長生きするように願う意味、「なつめ」は子孫が繁栄することを願う意味、「矢」は国のために武士になることを願う意味、「本」は学問に通達することを願う意味である。日本でも「筆や矢立ちならば学者、そろばんなら商人、鎌ならば農といった具合に前もっての約束ごとがあった」(『日本民俗学の視点1』(1976))。

子供の祝いは七五三、入園、入学、卒業、就職、成人式などがある。このような行事でよく耳にする表現は「〇〇おめでとう(ございます)」という言い方が一番多い。この表現は祝儀言葉として便利な言い方であろう。「おめでとう」というのは「めでたい」ということで、「めでたい」という言葉の語

源は古くて、「愛^めず」から出たものらしい。つまり、

「めでたい」は「愛^めでたい」と相手の幸福を祝うと

いう意味である。「めでたい」という言葉は中世からさかんに用いられているが、現在使っている「おめでとうございます」の表現は江戸時代からである(奥山1983:257)。

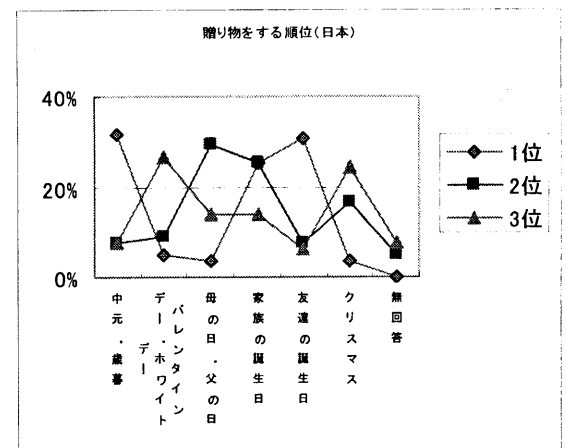
大人の祝いでは結婚、結婚記念日、賀寿などがある。日本では結婚をするときに結納が行われるが、

結納の品には「長熨斗^{ながのし}」、「松魚節^{かつおぶし}」、「子生婦^{こんぶ}」などがあり、それぞれ意味を持っている。「長熨斗」は慶事の贈り物につける熨斗あわびで、アワビをのばしたもので長生きの意味がある。「松魚節」はかつお節のことで、勝男武士、勝男節とも書き、昔から祝い事に使われる酒肴品である。「子生婦」は昆布。「よろこぶ」につながるともいわれる。子宝に恵まれるように、と言う意味が込められている。

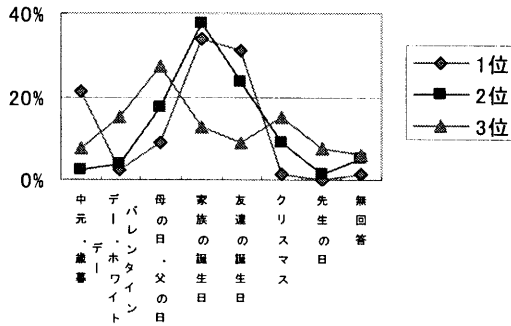
4.日・韓贈り物に関する意識調査

年中行事と通過儀礼の中から、中元・歳暮、バレンタインデー・ホワイトデー、母の日・父の日、家族の誕生日、友達の誕生日、クリスマスを中心に日・韓の贈り物に対する意識調査を行った。調査人数は日本79名、韓国80名である。アンケートの調査項目は①贈り物をする頻度の高いものを1位から3位まで選んでもらう質問、②贈り物の回数についての質問、③贈り物を手渡すときとカードに書くときの言葉についての質問、④贈り物の開閉についての質問、⑤贈り物の習慣についての好きなタイプについての質問、⑥贈り物を贈るとき気かけるところについての質問、⑦贈られてうれしいものについての質問である。ここでは①だけを紹介する。

4.1 贈り物をする順(日本と韓国)



贈り物をする順位(韓国)



贈り物をする順で日本と韓国の場合を比較してみると日本では中元・歳暮が多く見られた。反面、韓国は家族の誕生日が多く見られた。

井下 (1979)の研究によると日本で一番多くなされている贈物は中元・歳暮 (72.1%)が見られ、本研究と同じ結果である。その次が病気見舞い (71.9%)、家族の誕生日 (51.8%)である。

5. おわりに

贈答行動がなされる年中行事、通過儀礼を中心に、贈り物がなされる基本的な時期と、日本と韓国の相違点についてみてきた。

贈答という研究は文化的によく研究はされているものの言語的な面での研究はまだ不十分である。今までの考え方では文化と言語を離して考えがちであるが、よりよく異文化を理解するためには言語だけではなく言語から導き出せる文化を考えていかなければならないと考える。今回贈り物を中心として研究を進めてきたが、この中でも理解していかなければならない文化的な面と言語的な面が多数存在している。

今回の調査は大まかなことを取り入れて研究を行ったが、今後さらに細かい研究が必要になると考えられる。

注

1.近畿以西に濃厚に見られ、島根、岡山、広島など中国地方各地と四国の一部、九州各地と八重山にもある風習である 『日本民俗学の視点1』(1976)

参考文献

- 石川栄吉、梅棹忠夫、大林太良、蒲生正男、佐々木高明、祖父江孝男 (1994) 『縮刷版』文化人類学事典』弘文堂
- 井下理 (1979) 「贈答行動にみる日本人の人間関係についての一考察—贈り物とお礼の第一次調査資料より—」『年報社会心理学第20号』勁草書房
- 伊藤幹治 (1995) 『贈与交換の人類学』株式会社筑摩書房
- 伊藤幹治、栗田靖之 (1984) 『日本人の贈答』ミネルヴァ書房
- 岡山益朗 (1983) 「祝儀・不祝儀」頁 256 水谷修編『話しことばの表現』(株)筑摩書房
- 快適生活研究会 『冠婚葬祭』ワザあり事典』PHP研究所
- 金田一春彦・林大・柴田武 (1988) 『日本語百科大事典(縮刷版)』(株)大修館書店
- 金換 (1994) 『韓国と日本の比較文化論』講座制「民族大学」ブックレット4 (株)明石書店
- 清ルミ (2003) 「「つまらないものですが」考—実態調査と日本語教科書との比較—」『異文化コミュニケーション研究 第15号』
- 高崎正秀、池田弥三郎、牧田茂 (1976) 『日本民俗学の視点1』日本書籍株式会社
- 高崎正秀、池田弥三郎、牧田茂 (1976) 『日本民俗学の視点2』日本書籍株式会社
- 張壽根、兎玉仁夫訳 (2003) 『韓国の歳時習俗』韓国の学術と文化14 法政大学出版局
- 牧野成一 (1996) 『ウチとソトの言語文化学—文法を文化で切る—』アルク
- 室伏哲郎 (1980) 『贈る論理・贈られる論理』PHH研究所
- 朱月榮(1994) 『禮法事典』修学社(韓国 ソウル)